は、船の帆卽ヒロなり、又軍裝の保呂てふ物も帆と同言なるべし、かく見る時は、帆も借字には非ず、正字と云べきか、斯て尋は長〻一丈ならむ者は、尋も一丈あるべく、五尺の人は、尋も五尺なり、これ大抵定れる度なり、然れば小き物は手にて度り、大なる物は尋にて度れりと見ゆれば、手置帆負命と、御名に負給へるなるべし、彥狹知命、彥は例の稱辭、狹知は、狹は借字にて度知の義ならむか、サシシリのシシ、一言に約まるは常なり、其は尺度もて、物を度り給へるよりの名なるべく所思ればなり、但し毛能佐斯を唯に佐斯とばかり言むは、如何にも思ふべけれど、毛能とは弘く諸物を指て言辭にて、佐斯とのみ云ぞ本語なりける、其はサシガテ、曲尺のサシは更なり、さし對ひ、さしふたぎ、又二人にて物する事を、さしにて爲と云などのさしも、此と彼と差通れるを云て、同意なるべし、さて掌は、彼事を司る、此處を領る、また神ぞ知るらむ、などの斯留、みな同言にて、尺度を掌給へる故の御名なるべし、又若くは今の尺度と云もの、其起原は、天津神の大御長より出たらむも、其を尺度と爲て用ふる事は、此神の始めて製り給ひけむも知べからず、猶よく考ふべし、其は尺度は、家作に無くて叶はざるは更にも云はず、萬の器械を作るにも、必用ふべき物なるを、此二神さる方に功く坐ます故に、各も〻其事を御名に負給へるなりけり、

〔古今要覽器財〕古尺大小量

或人問ふて云はく、古語拾遺の本文に天御量とあるところの本註に、大小量とあるを大小の度なりといへるは、實にさも有べく聞ゆれど、さらばその大量小量といふは何なる度ぞ、大量は今の大尺、小量は今の小尺なるか、今世に傳はる尺度のしな〻あるが中に、いづれか皇國の眞度なる、くはしく其說をきかむ、答ふ、廣成宿禰の謂ゆる大小量は、すなはち今の大尺小尺にて、宮殿造營の度なれば、大量とは大尺をいひて度地にもちひ、小量とは小尺をいひて造營にもちふ、其尺度は今の世まで番匠の用ふる鐵尺とも曲尺ともいふ、すなはち其度なり、抑この大小量は天つ神世に、天太玉命、かの大御神の新宮を造らせ給ひし以來、その子孫たる齋部首の家に傳はり、人世となりて、神武天皇の御世に御殿をつくり給ふに、太玉命の孫天富命こ